

前接形式からみた「から」と「ので」：推量の「らしい」と「ようだ」を用いて

著者	李 惠正
雑誌名	言語科学論集
巻	14
ページ	13-26
発行年	2010-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/50677

前接形式からみた「から」と「ので」 — 推量の「らしい」と「ようだ」を用いて —

李 惠 正

キーワード: 接続助詞、事態の原因・理由、主観性、客観性

要 旨

原因・理由を表す接続助詞「から」と「ので」の相違点に関する研究は、「から」は主観的、「ので」は客観的な根拠で原因・理由を述べるという永野(1952)の研究が定説となっている。本稿では、「から」と「ので」を区別できる一つの基準である推量の助動詞「らしい」と「ようだ」を前接形式として、主観的な原因・理由をあらわす「から」は接続できる一方で客観的な根拠に基づく「ので」とは共起し難いという仮説を立て、BCCWJから検索された実例を文体とジャンル別に分析する。その分析結果から、「から」と「ので」の持つ「主観性/客観性」という特徴は「から」と「ので」を区分付ける根拠であるかを再考する。

1. はじめに

一般的に「から」と「ので」は前の節(前件)に後接し、後ろの節(後件)と原因、理由の意味関係で結ぶ接続助詞である。この接続助詞「から」と「ので」はその機能が非常に類似しているため、多くの研究がなされてきた。その中でも定説であると言われているのは永野(1952)の研究¹である。永野(1952)は「から」と「ので」の前件と後件の意味的關係を分析し、表現者が前件を後件の原因・理由として主観的に措定して結びつける場合は「から」を用いる。一方で前件と後件の原因・結果、理由・帰結の關係が表現者の主観を超えて存在する場合、主観を交えずに客観的に描写するときに「ので」を用いると論じている。その後、「から」と「ので」の持つ「主観性/客観性」の問題は数多い先行研究の論争点になってきた。さらに、類語例解辞典(1997)では「前件が推量表現である場合に接続する用法は「ので」にはない」と説明されているが、未だ明確な基準は提示されていない実情である。本稿は一般的に「主観的な表現」であると言われる推量を表す「らしい」と「ようだ」を前接形式として用い、「から」と「ので」が持つ「主観

¹ 以下、本稿では永野説と呼ぶ。

性/客観性」判別の新たな基準を提示することが目標である。

2. 先行研究

「から」と「ので」の「主観性/客観性」の問題は永野(1952)によって初めて議論された。以下の表1は永野の主な主張を簡略にまとめたものである。

表1. 永野(1952)による「から」と「ので」の区別

主張 から /ので	後節が 未来/ 命令を 含む文	倒置	終助詞 的用法	係助詞、 「といっ て」など をつけ られる	後節が 客観的 叙述で ある	前節が 推量や 未来の 意味で ある	前節に 「のだ/ のです」 をつけら れる
から	○	○	○	○	×	○	○
ので	×	×	×	×	○	×	×

永野(1952)の研究以来、これを中心に「から」と「ので」に関する研究は様々な観点からなされてきた。

趙(1988)は永野説に反論しながら「ので」は相手の対象に対する認識が低いと話し手が判断するときに使われると主張している。これに永野(1988)は、自身の説を補足するためアンケート、新聞社説、自叙伝、日常会話、戯曲作品から出現数を比較した研究を発表したが、大きな発展は見られない。今尾(1991)は「から、ので、ため」の選択条件を文レベルのモダリティ制約と焦点の有無の観点から分析しており、「主観性/客観性」を反対の概念として考えるのではなく連続する概念としてみなした点が注目できる。尾方(1993)は説明すべき事態が状況的・文脈的に与えられている場合に「から」を用いると述べているが、その根拠が十分ではない。また、伊藤(2005)も4文学作品から「から」と「ので」の出現例を調べて従属句と主要句の文末形式を比較したが、「から/ので」の出現数を重視しただけにとどまり「主観性/客観性」の判断までは至らなかった。

最近の研究としてはBCCWJ²を用いた小西(2010)の研究がある。小西は「から」と「ので」の使い分けを、意味は排除して前接文体と文末文体の形態的特徴から分析した

² 国立国語研究所:「現代日本語書き言葉均衡コーパス」2009年度版。

研究である。この研究は意味的な観点からの分析が必要であるが、内省に頼ってきた研究方法に新しい手法を取り入れた点で注目すべきであると考えられる。

上述の先行研究は永野説の用例などに疑問を抱きながらも「主観性/客観性」という概念による判断に同意している一方で最大の論争点でもある。本稿は「から」と「ので」による接続文の前件の文末に推量表現である「らしい」と「ようだ」を接続して、その共起パターンと選択条件を分析する。そうすることで「から」と「ので」が持つ「主観性/客観性」の意味究明における一つの基準が提示できると考えられる。

3. 「らしい」と「ようだ」

現代日本語において「らしい」と「ようだ」は等しく推量の助動詞である。しかし、同じ推量を表すと言っても使われ方において若干違いが見られる。その相違点に関する主な研究として森田(1980, 2007)と田野村(1991)がある。まず、森田(1980, 2007)は「らしい」と「ようだ」のあらゆる意味機能を詳しく分析し、関連語と比較した研究である。森田(2007)によると、「らしい」は外在する情報を手掛かりとしたかなり客観的な推量判断であり、「ようだ」は自身のその時の感覚に基づく直観的な判断である。言い換えると、「らしい」は根拠に基づいたかなり確実性のある推量の言い方であり、「ようだ」は直感的な感覚による印象であるため不確かさを残した言い方である。

田野村(1991)もそれぞれの意味、用法、相違点などを様々な角度から考察した研究であり、森田(1980, 2007)と同じ見解を示している。「らしい」はある根拠に基づく推定を表すものであるため、その推定の表現の前後に根拠となることがらが表現されていることが非常に多い。その一方、「ようだ」は外見や印象がどのようなものであるかをいわば短刀直入に表現するものであると述べている。

以上、「らしい」は客観的事実に基づく推量である。「ようだ」は感覚による推量であるかによって使い方が分けられる推量の助動詞である。推量を表す「らしい」と「ようだ」は「から」の前接形式としては用いられるが、「ので」の前にはつくことができないという永野説は現代日本語において合致していると言えるだろうか。そこで、本稿はBCCWJを用いて、現代日本語において「らしい」と「ようだ」が「ので」より「から」を明らかに選好するという永野説を検証し、「主観性/客観性」という概念で「から」と「ので」の特徴を正確に把握できるかを考察する。

4. 『～「らしい/ようだ(な)」+「ので/から」～だ。』

4-1. 調査の目的と概要

本稿の目的は、「から」と「ので」の相違点について永野(1952)が論じる「から」の主観性、「ので」の客観性という特徴が「から」と「ので」を使い分けられる一つの基準であるかを検証し、そのような性質を新たな観点から再解釈することである。主観性・客観性に関する先行研究は数多く存在するものの、まだ統一された見解には至っていない。それゆえ、本稿では主観的な推量の表現と「ので」は共起しがたいことから、推量の「らしい」と「ようだ」を前接形式とした実例を文体とジャンル別に分析し、「から」と「ので」が主観的か客観的かによって判断されるのではなく「から」と「ので」を選択する発話者の観点から考える。

調査データとして、国立国語研究所が公開しているBCCWJを使用した。調査データと語数は次のようである。

表2. 調査データ

ジャンル	数	語数	サンプル数
書籍		約 3,000 万語	10,423 サンプル
白書		約 480 万語	1,500 サンプル
Yahoo!知恵袋		約 520 万語	45,725 サンプル
国会会議録		約 490 万語	159 サンプル

検索ツールは全文検索システム「ひまわり」(ver.1.3 β 03)BCCWJパッケージ3を用いて検索を行った。検索対象は「から」と「ので」が接続助詞として用いられ、「らしい」と「ようだ」が前接している形式を対象とする。「らしい」と「ようだ」は「辞書形」、「丁寧形(～です)」、「タ形(だ(か) った)」の3つの活用形の前接形式ごとに検索した。さらに、「ので」の口語である「んで」も調査し、その結果は「ので」とまとめて表示した。キーワードを含む文脈を抽出し、「～から、～だ。」という形式のみを分析データとし

³ 全文検索システム「ひまわり」に現代日本語書き言葉均衡コーパスのデータを取り組んだものである。

た。「～は～からだ。」のような倒置の形式、「～からだ」とのような終助詞的な用法の形式、「というので」の慣用句、「からといって、からって」などの複合辞は対象外とした。

4-2. 調査結果

次の表3は前接形式ごとに「から」と「ので」の出現回数を示したものである。

表3 「推量の前接形式」と「から/ので」の出現数(延べ語数)

ジャンル 前接形式	国会会議録		Yahoo!知恵袋		白書		書籍			
	から	ので	から	ので	から	ので	から		ので	
							文学	文学以外	文学	文学以外
らしい	0	1	12	65	0	0	19	13	18	7
らしかった	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
らしいです	0	0	3	1	0	0	2	1	0	0
ようだ(な)	1	4	3	97	0	0	31	11	25	35
ようだった	0	0	0	1	0	0	3	1	6	3
ようです	45	4	21	44	0	0	9	14	1	6
計	46	9	39	208	0	0	104		102	

表3から分かるように、「白書」は全ての前接形式において出現数がゼロである。白書とは、日本の中央省庁の編集による刊行物のうち、政治社会経済の実態及び政府の施策の現状について国民に周知させることを主眼とするものである。政府の施策に

¹「子供に十分な教育やしつけを与えたいから」が41%で第1位、第2位は…

など計7件

⁵「農業の仕事をしたかったから」とする割合が次いで高くなって

など計4件

ついでに現状分析と事後報告を中心とした公表資料であり、統計、図表、法令などのデータ集は含まれない。このような特徴があるため、願望や推量の表現はほとんど用いられない。数少ない例として、国民の意識調査の結果として「～から。」という形が「たいから」⁴で7件、「たかったから」⁵で4件見られたが、いずれも本調査の対象にはならないため除外した。本調査の結果は実態調査と施策の現状を述べるという「白書」の特徴が如実に表されていると言える。

4-3. 分析

4-3-1. 「らしい」、「ようだ」と「から」

表1をもとに、まず、「から」との共起関係をジャンルごとに見ていく。全体的に「らしい」より「ようだ」が「から」と共起する出現数が多い。その中で、国会会議録の「ようですから」が最も多く、書籍の「ようだから」と「らしいから」がそれに続いている。書籍は詳細な分類のため文学と文学以外の二つに分けて分析しており、「ようだから」と「らしいから」は文学での出現が多い。その一方、「らしかったから」は各ジャンルにおいて出現数がほとんどゼロであり、書籍のみ1件検索された。「ようだったから」も出現数が非常に少なく、知恵袋1件、書籍15件のみであった。これは、推量助動詞の「だ(か)った」の形は「から」と「ので」とはあまり共起しないことである。また、ジャンルごとに考えると、「らしい」と「ようだ」は書籍において「から」ともっとも共起している。これは書籍の性質上、発話場面が多様であるからだと考えられる。

次に、「から」と共起した文の後件の文体を分析する。前述した表1が示すように「から」は「ので」に比べて制約が少なく使用範囲が広いが、客観的叙述の後件には用いられないと主張されてきた。言い換えると、主観的である叙述などと共起する傾向があることである。形態的には「丁寧形」とよく用いられるとされてきた。このようなことを踏まえて、客観的根拠に基づく推量の「らしい」と主観的で直感的な推量である「ようだ」と共起した「から」文の後節を具体的な例から見ていく。「から」との共起が最も多く見られる国会会議録の「ようですから」の例の文体を分析した結果、会議というジャンルの特徴として、ある事態における個人の見解を述べる、または質問に対する答えを促す要請・依頼の文体が多数見られた。

(1) 質問者の御了解が得られぬようですから、政府側は重ねて御答弁を願います。

- (2) どなたもないようですから、次の問題に移ってください。
- (3) お忙しいところ、ずっと張り付いていただけるようですから、片山総務大臣に基本的に全部お尋ねをしたいと思います。
- (4) 多少の誤解もごきますようですから、私からまず事実関係を申し上げておきます。
- (5) 特に最近では法律を守れというあれが厳しいようですから、私らも守るべきだと思うのです。

(1～5)は前件を理由・根拠にして、(1)(2)は聞き手に対して要請・依頼を、(3)(4)(5)は話者の意志を表す文体の後件である。その根拠とする前件の内容には主観的な感覚に基づく「ようだ」が用いられている。丁寧形の「ですから」は小西(2010)が指摘している典型的な使われ方に合致していると言える。国会会議録では「らしい」は「辞書形」、「タ形(だ(か)った)」がともに0件、「ようだ」も1件のみであり、ほとんど「ようですから」の形で用いられている。このような文体から主観的な見解を主張する場合はほとんどであると考えられる。また、Yahoo!知恵袋(以下知恵袋)では「らしい」は辞書形、「ようだ」は丁寧形が多数用いられている。

- (6) 水菜はしもやけにもいいらしいから、今の時期にたくさん食べておきましょう。
- (7) でも今日は天気不安定らしいから、傘もっていっておくといいかも。
- (8) あなたのご主人は後者のようですから、おそらくこれからは食べないと思いますよ。
- (9) でも、はいつたところで、日本の刑務所は住みやすいようですから、そこも改善して欲しいです。

(6)(7)は「らしい」を用いて前件の事実が後件において客観的根拠であることを表

している。それに比べて(8)(9)は主観的な話者の判断であり、確実な根拠は明らかではない。また、後件は勧誘形、推量形、見解、願望の形式など多様であり、主観的な叙述である。知恵袋はインターネット掲示板での質疑応答である。そのため、話し言葉の特徴と書き言葉の特徴が両方見られる。特に、質問に対する返答において丁寧形や改まった表現が多く見られる。

最後に書籍では「らしい」と「ようだ」の辞書形が「から」と最も共起している。

- (10) 年々女子が少なくなっているらしいから、いずれは男女共学になるのだろう。
- (11) 「きみは約束があるらしいから、ぼくはこれからルクレシのところにいこうと思ってるんだ。」(「」は会話文、以下同様)
- (12) 「実はさんざん相談したあげく、塚本君に所長になってもらいたいと思っている。お前は塚本君と親しいらしいから、わきからよく応援しろ。」
- (13) 「いろいろ理詰めで考えるタイプのようだから、いずれおかしいと気がつくと思うのです。じゃあ、お兄さんたちから、お知らせ下さい」
- (14) 鳥口辺りはまだ納得出来ずにいるようだから、この悲壮な面持ちが、冷酷な鉄面皮に見えているのに違いない。
- (15) 少し調子がよくなったようだから、もう大丈夫とばかりにサポートを忘れてしまうと、また再発してしまったという例も多くあります。

書籍の特徴として文学においては会話文と地の文があり、会話文は発話者の見解や勧誘、意志などの文体が、地の文では状況の客観的説明や伝聞などの文体があらわれる特徴が見られる。また、先行研究で述べたように、「から」の使い方において制約があまりないため、上にあげた例からも推量の前件に起因して表れる後件の文体が多様である。

4-3-2. 「らしい」、「ようだ」と「ので」

表1が示すように、永野説において「ので」は「から」に比べ制約が多く、後件の客観的叙述の場合を除いて他の文体と共起し難い。言い換えると、前件で主観的な推量の表現が使われると「ので」の使用が非常に少なくなると言える。推量の表現の中でも「ようだ」との共起は最もそうであると予測される。形態の違いとしては「ので」は「から」に比べて辞書形と用いられる傾向があると言われている。

しかし、「らしい」と「ようだ」の辞書形と「ので」は「知恵袋」と「書籍」での共起頻度は高いが、国会会議録では各1件と4件にとどまり、ジャンルによって共起の様相が異なる。さらに、タ形は全ジャンルにおいて出現数が非常に少なく「らしかったので」が1件、「ようだったので」が10件であった。知恵袋の「丁寧形+ので」は45件であり、「丁寧形+から」24件の2倍ほど多く検索された。

ほぼ固定的であると言われてきた「辞書形+から」の文体は、知恵袋において必ずしも該当するとは言いがたい。これは、知恵袋というジャンルの性質上、丁寧形がよく用いられる点が作用したと考えられる。このような点について宮内他(2009)は、知恵袋は客観的な表現の多い文章であり、かつ対者的な配慮の見られる丁寧な文体をとる傾向があると述べている。

次に後件の文体を見てみよう。国会会議録では「から」が46例であることに比べ、わずか9例のみである。

(16) 塩田さんにお聞きしたいんですが、安保事務レベル協議で、私は大変ユニークな名前をもらってこれたらしいので浅尾さんにお聞きしようかと思ったんですが、

(16)は「らしいので」が伝聞の形式であると言える。森田(2007)は外から入った情報を根拠にしており、伝聞や現状を手掛かりとするのが「らしい」であると述べていることから本稿は伝聞の形式も客観的な根拠の範疇に入ると考え、「らしい」の用法として認める。

(17) 話を聞くと、制度はかなり複雑なようなので、調べてみました。

(18) 子供にも一定の程度はわかりにくい工夫をするというようなどころもあるよ

うですので、ちょっとその辺を御説明いただけませんかでしょうか

- (19) 私どもの承知しているところでは、その業者と長谷工の間に投資顧問契約というようなものがあつたということではないようなので、投資顧問業法上の問題は生じないのではないかというふうに考えております。

「から」は質問に対して話者の主観的な見解を述べることに於いて主観を押しつけるような印象を与えるため「ので」を用いる場合もあると言われているが、「ので」の出現数が「から」に比べ非常に少ないことは待遇的な理由のみではないと考えられる。そこで、(16～19)はある事態に対する発話者なりの根拠に基づいた判断による要請文、または見解文であり、発話者が承知していることの再確認であると考えられる。そのようなことから、国会会議という性質上、発話者の主観を強く主張する必要はあるが、その主張の理由・根拠が聞き手においてどの程度負担をかけているかという認識の距離感によるものであると考えられる。知恵袋における「から」と「ので」の出現数に大きな開きが見られるのも、専門的知識や見解を述べているものの、それが聞き手に負担がかからないように待遇的な意味合いが含まれていると考えられる。

一方、推量の「らしい」と「ようだ」が「ので」と共起した出現数が「から」より多い208例が検索されたことは、「ので」の前件として推量や未来の意味と共起することができないという永野説とは正反対の結果である。さらに、後件は客観的叙述が多く、未来や命令をあらわす文は共起されないという点にも合致しない例が多く見られた。たとえば、

- (20) ちなみに、大人が口移しで物をあげたりする事で虫菌菌が移ったりするらしい
ので、気をつけてあげて下さいね。

- (21) 検査項目や臨床について、覚えることもたくさんあるようなので、入社されたらがんばって勉強してください。

- (22) おそらくスパイウェアとか、設定しているHPが書き換えられたりしているのかもしれないね。下のサイトで対策などかなり練られてるようですので調べてみてください。

(20～22)は明らかに前件の情報を根拠にして聞き手に丁寧な形式で適合した行動を促している。一方、前件と後件に推量の文が共起する例や願望をあらわす後件の例も見られる。

(23) 冊子小包は中が少し見えるように封をしなければいけないらしいので、面倒であれば封をせず、中身を局員さんに確認してもらった方が楽かもしれないです。

(24) シマウマの地肌は濃い茶色らしいのでどちらかと言えば黒地に白縞が正解でしょう。

(25) 他に指定銀行に口座をつくる方法もあるようなので、そっちだと勝手にできるかもしれません。

(26) ディアゴスティーニも通販で販売していましたが、色々他の道具もセットで付いてくるようなので、カラスプレーだけが欲しいのですが。

(23～26)の推量・願望を表す後件の例は「ので」と使われないとされてきたが、前件の事実を根拠として丁寧形と用いられている。しかし、「ようですので」の44例には推量の後件と使われていない。これは、「らしい」と「ようだ」という客観的または、主観的推量の意味が原因であるよりは「ので」の持つ場面性・発話状況によって選好されると考えられる。

続いて書籍では「らしい」より「ようだ」と共起する例が多く、文学と文学外の間に出現数の違いは見られない。「らしいので」と「ようなので」の辞書形での出現数が高い。これは書籍の中、文学以外の新聞や雑誌などの文体からの影響であると考えられる。

(27) 県指定の史跡らしいので、雨情の生家に行ってみることにした。

(28) 「今日の昼間、おふみから色々聞いたよ。あんたにはまだ話してなかったらしい
んで、おれの口から先にいうことになるが」

(29) その慧能は、みんなが何か騒いでいるようなので、「いったい何があったのだ」と仲間に訊くわけです。

(30) ただ、概して鶏肉は牛、豚に比べて足が早いようなので、いくら冷凍でも一週間以内に食べるのがいいでしょう。

(31) 女がそのことに腹を立てているようだったので、とりあえずぼくはあやまっておく。

(32) 地域ぐるみで行う場合には、助成が出るケースも出てきたようですので、自治体や指導機関からの情報も大切にしてください。

(27～32)の後件は意志、状況の主観的説明、推量、命令形の文体であり、「ので」とは用いられないとされてきた。しかし、BCCWJから抽出した実例では制約に関わらず使われている。書籍における「ので」はある事態に対する状況の説明や見解を述べる内容がもっとも多い。

5. まとめ

本稿は接続助詞「から」と「ので」の違いについて定説とされている永野(1952)の研究をもとに、BCCWJを利用して検索された結果から考察したものである。中でも、「らしい」と「ようだ」の推量をあらわす前接形式は「ので」といっしょに用いることが難しいという点についてBCCWJでの出現数を調べた結果をジャンル別、形式別に分析し、「主観性/客観性」に関する永野説の区別を再考した。

本調査の結果として、まず、全体出現数から「から」より「ので」を用いており、全てのジャンルにおいて「らしい」より「ようだ」が選好されている。その中でも「ようなので」がもっとも使われており、「らしいので」、「ようですから」の順である。「から」は書籍で、「ので」は知恵袋における出現数が多く、「らしい」と「ようだ」ともに知恵袋での使用が多く見られた。また、「タ形(だ(か)った)」は「らしかった」が1例、「ようだった」が14例で出現数が非常に少なく、「タ形(だ(か)った)」は前接形式としてさほど用いられないことが分かった。「丁寧形」は「らしいです」が7例である一方、「ようです」は144例であり、丁寧形は前接形式としてもよく用いられると言える。

次に、形式面からは全体的に「から」と「ので」は客観的事実に根拠をおく「らしい」より、主観的感觉に基づく「ようだ」を選好する傾向があると言える。また、「らしい」と「ようだ」とともに「から」より「ので」を用いる。つまり、ある事態についてその根拠が客観的である、または自分の主観的な感覺をもって推量した内容であるかは発話者のその根拠に対する信頼度であり、聞き手にどの程度の負担をかけるかによって「らしい」と「ようだ」、そして「から」と「ので」を使い分けていると考えられる。発話者が持っている情報に客観性が高く、その情報を根拠にして聞き手に強く訴えて負担をかける場合は「らしい」と「から」を、聞き手にもっとも負担をかけずに柔軟に伝えたい場合は「ようだ」と「ので」を選択することである。図1はその相関関係を表したものである。

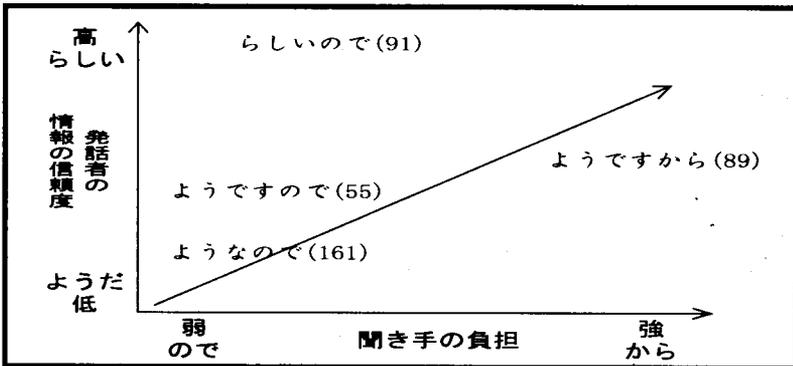


図1. 相関関係 (() は出現数)

このような関係をもっとも確実に表しているジャンルが知恵袋と国会会議録である。知恵袋は質疑応答の掲示板であることから質問に対してその根拠が専門的なことから主観的なものまで多様であり、「らしい」と「ようだ」が僅差で用いられている。さらに、待遇的な性質も持つため、聞き手の負担が少ない「ので」が選好されている。国会会議録は自身の主観的な意見を述べることで、相手への要請、是正を求めるため聞き手の負担が大きい「から」を選好する。国会会議録で「ので」の使用が非常に少ないのはこのような性質のためであると言える。

本稿では、「から」と「ので」が持つ「主観性/客観性」について推量表現を用いて分析を試みた。「主観性/客観性」は場面や文体からの規定より、ある事態に対しての情報

における発話者の信頼度であり、同時に聞き手に与える負担の強弱であると言える。それで、「ので」は発話者の主観的な見解を聞き手に負担がかからないように話したいとき用いられ、「から」は信頼度の高い事実を聞き手に強く強調・促すときに用いられる。

本調査の結果は永野説と異なる点が多かった。これは今までの研究者の内省による研究ではなく、BCCWJを通じて膨大な用例を観察できるようになった今日、永野説を再検討してみる必要性和本稿の結果が有意味であることの傍証であると考えられる。このような主張について丁寧形と辞書形の選好に関するさらなる分析が必要であり、次の課題としておく。

参考文献

- 伊藤 勲 (2005) 『条件法研究—いわゆる接続助詞をめぐって』近代文芸社。
- 今尾ゆき子 (1991) 「カラ、ノデ、タメ—その選択条件をめぐって—」『日本語学』10 (12), pp.78-89.
- 尾方理恵 (1993) 「「から」と「ので」の使い分け」『国語研究—松村明先生喜寿記念会編』明治書院。
- 小西 円 (2010) 「「から」と「ので」の形態的特徴と使用ジャンル—日本語教育における類義表現の扱いを考える—」『特定領域研究「日本語コーパス」平成21年度公開ワークショップ(研究成果報告会)予稿集』, pp.131-138.
- 小学館辞典編集部 (1997) 『使い方の分かる類義語例解辞典』小学館。
- 出野村忠温 (1991) 「「らしい」と「ようだ」の意味の相違について」『言語学研究』10, pp.62-78.
- 趙 順文 (1988) 「「から」と「ので」—永野説を改釈する—」『日本語学』7 (7), pp.63-77.
- 永野 賢 (1952) 「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』29 (2), pp.31-41.
- (1988) 「再説・「から」と「ので」とはどう違うか」『日本語学』7 (12), pp.67-83.
- 宮内左夜香他 (2009) 「BCCWJにおける接続表現形式とジャンル別の文体的特徴の関連について」『特定領域研究「日本語コーパス」平成21年度全体会議予稿集』, pp.99-106.
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語2—意味と使い方』角川書店。
- (2007) 『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版。